

ナボコフの『偉業』における光と闇

諫 早 勇 一

ウラジーミル・ナボコフの『偉業』(ロシア語原題 *Invokatsiya*, 1931-32、英語版 *Glory*, 1971)¹⁾は、彼のロシア語小説の中でも最も低い評価を受けている作品だろう。

A. Field (1967) がこの作品に下した “the least exciting”²⁾ という評価、さらに彼の “(*Glory*) does not challenge the reader with subtle multiplicity of meaning”³⁾ という批判以来、ムリヤ - ルチク (1997) の、先行する作品に比べると『偉業』には「文体的な新機軸も輝きも、言葉の名人芸もはるかに乏しい」⁴⁾ という指摘に至るまで、『偉業』はきらびやかなナボコフの作品群の中で、異質な扱いを受けてきた。従って、これまでこの作品があまり論じられてこなかった (“scholarship on *Glory* is sparse”⁵⁾) のも当然かもしれない。

ただ、この作品の構成はけっして見た目ほど単純ではない。ナボコフ自身が英語版に寄せた序の中でも “(the fun of *Glory*) is to be sought in the echoing and linking of minor events, in back-and-forth switches, which produce an illusion of impetus ...”⁶⁾ と解説されているように、細かく読んでいけば、この作品にもナボコフ小説に特有のさまざまなしかけが浮かんでくる。そして、そうしたしかけの中で最もよく論じられてきたのが「繰り返されるイメージ」(recurrent imagery⁷⁾) だろう。

「繰り返されるイメージ」はナボコフ小説全体に当てはまるものといってもよいが、この『偉業』に関しても既にいくつかの指摘がなされている。たとえば、Toker (1989) は「森の中に消えていくくねった道」(the winding path

「言語文化」1-1: 1 - 17ページ 1998.
同志社大学言語文化学会 © 諫早勇一

that disappears into a forest)⁸⁾と、「水の音」(the sound of the water)⁹⁾をこの作品の2つのライトモチーフとしているが、とりわけ前者がこの作品の「おとぎ話」的性格¹⁰⁾の骨格を形成する重要なイメージであることは疑いない。この他、train journeys¹¹⁾ や the trail¹²⁾ などいくつかのイメージをここに付け加えることも可能だろう。

だが、これらに劣らず読者の注意を引きつける light(s) のイメージについては、論者たちのおびただしい引用にもかかわらず、「繰り返されるイメージ」としてその意義を考察されているとはいいがたい。さらに、しばしば light(s) の背景として、対照的に強調されている black, dark, darknessといった語にはこれまでほとんど注意がはられてこなかったと言ってよい。こうした観点から、以下『偉業』に現れた「光」と「闇(黒)」のイメージを追いながら、その意味を考察していきたい。

* * *

さて、ナボコフ小説を論じるにあたって、必ず突き当たる問題がある。それは、ロシア語版で論じるべきか、英語版で論じるべきかという問題で、この問題を解決するのは意外に厄介でもある。「原作」という意味からロシア語版で論じるべきだというのも一つの考え方だが、近年ロシア語に堪能な欧米の研究者たちの間でも英語版重視の傾向が強い。それはおそらく、原作者自身の「責任訳」である以上、新しい版(=英語版)を無視できないという理由によるものだろう。

さらに、作品によってロシア語版と英語版の相違の程度が大きく異なっていることも、この問題をいっそう厄介にしている。『偉業』に関してみれば、相違はさほど大きくないが¹³⁾、ここで問題とする light(s) では、ロシア語版で (光) (灯火) と、別の単語で表現されているものが、英語版では統一的なイメージで表されているように、その違いは無視できない。そこで本論では英語版を主テキストとし、ロシア語版を参照しながら、以下論じていきたい。

* * *

『偉業』における light(s) のイメージは何よりも、主人公マルチンが夜行列車の窓から見る遠くの「灯火」(,) という形で表されている。若いマルチンは両親と一緒に Sud Express に乗り、列車の窓から遠くに灯火 (a handful of lights in the distance, in a fold of darkness between two black hills) (21) を認める。そして、この灯火は自伝に描かれているナボコフ自身の体験としばしば重ね合わされる¹⁴⁾ だけでなく、物語の後半で一人南フランスに向かったマルチンがやはり夜行列車の窓から発見する灯火 (a necklace of lights, far away, among dark hills)(157) とともに直接に結びつけられている。両者の明らかな類似は作者自身の明確な意図を感じさせよう。

だが、この灯火に関する言及は数多く、後者の英文にうかがえる宝石の比喻¹⁵⁾ や、列車から見た灯火の源を訪ねたマルチンの誤解 (灯火の源は Molignac という村だと思ってそこを訪れたが、実際には Molignac は列車からは見えないと言われた)¹⁶⁾ についてはいくつかの論があるにもかかわらず、この灯火が in a fold of darkness between two black hills, among dark hills (下線は引用者) に見えたことについてはほとんど論じられることがない。しかし、既に述べたように、この作品に頻出する light(s) のイメージが、しばしば「闇」「黒さ」といった概念と対置されていることは無視できない事実だろう。次にそれを具体的に眺めていこう。

* * *

英語版で light(s) が最初に現れる場面¹⁷⁾ は、5 章で革命後のクリミアの夜マルチンが黒海を眺める場面 (To the left, in the murky, mysterious distance, shimmered the diamond lights of Yalta.)(20) だろう (宝石の比喻はここにも見てとれる)。そして、ここでは dark と意味の近い murky という語が用いられている¹⁸⁾。

6 章の冒頭では、このイメージが繰り返され (the clustered lights of Yalta amid the extensive blackness) (20)、lights と blackness の対比はいつそう明らかな

になる。6章ではさらに、既に引用した幼年時代に夜行列車の窓から見た lights の記述があるが、その引用の直後には次のように描かれている。

“ the lights would hide and reappear, and then they came twinkling from a completely different direction, and abruptly vanished, as if somebody had covered them with a black kerchief. ” (21) (下線は引用者)

この夜行列車から見た lights の記述は6章でさらに続いているから、the familiar lights (22) が現れる前に everything grew dark (22)とあるのも当然だろうし、この灯火が消え去る時には、The undulating black night resumed its smooth course and the elusive lights gradually thinned into nothingness. (22)と結ばれているのも納得できる。5章6章はまさしく闇と灯火の対置に満ちている¹⁹⁾。

マルチンはその後1919年に母親とロシアから亡命し、船でギリシアを経てマルセーユに着くが、マルセーユから叔父ヘンリーの住むスイスに向かう夜行列車でも(10章)再び his beloved lights (41) を探そうとする。マルチンを何よりも魅するものは、those lights, those wails in the night (41) なのだから。

さて、亡命後いったんスイスに落ちついたマルチンは、ケンブリッジ大学を進学先を選ぶが、イギリスに旅立つ直前、スイスの家の外で灯火を見る (The outlines of the mountains were indistinct, and here and there, in the folds of the darkness, dots of light scintillated in twos and threes.)(48)。この灯火は列車の窓から見たものではないが、6章の in a fold of darkness という記述とこの11章の in the folds of darkness という記述の類似は注目される。ここまで light(s) がつねに闇、黒さと対置されていることは容易に確認できよう。

ところが、マルチンがイギリスに移るや、彼の身の回りから light(s) は姿を消してしまう。11章でロンドンに到着したマルチンは lights on the Thames (49)²⁰⁾ や (マルチンが目にしたものとして、他に the black handsome cabs や a policeman in a shiny black cape [49] が並列されている) the sparkling lights (51) を見るが(ただし、これは売春婦の目の中の光) その後ケンブリッジで大学生生活を送る彼の回りに light(s) はほとんどその姿を現さない²¹⁾。たまたに現

れたとしても、それは20章の a point of light (82)や on which the light changed (83) のようにロシア語版で と訳されるような光（自動車のヘッドライトや、太陽の光など）が大部分といえる²²⁾。そして、大学卒業後、彼が思いを寄せるソーニャを追ってベルリンに移った後も事情はあまり変わらない。32章に現れる the staircase lights flashed on (139)の lights も （電球の光）だ。ただ、 に当たる light(s) は33章に I see radiant light in her name, that special light (142), A light from there (142)といった記述があり、34章には with which the light of a streetlamp animated (143-144)という記述も見られるから、ベルリン時代にその頻度を増しているとは言えるかもしれない。

従って、 に対応する light(s) が再びその姿を現すには、ついにソーニャへの思いを断ち切ろうと、マルチンが一人南フランスへと旅立つ時まで待たなければならない。そして、夜行列車の窓から遠くに灯火を見つける37章から、南フランスの村を去る39章まで light(s) と闇の対置はテキストに満ちあふれている。

37章では、既に引いた a necklace of lights among dark hills を列車の窓から見つけた後、マルチンはその灯火を探そうと (in search of those lights) (157)列車を下りる。そして、食堂のおかみに I saw lights in the distance (159) と述べて、それが Mogniac という村の明かりであることを聞き出し、そこを訪れようと決心して a dark square (159) に出る。ついで38章では、徒歩で Mogniac にたどりつき、こうに感激する。

“ So this was where they sparked at night, the lights which had beckoned to him ever since his childhood! ” (161) (下線は引用者)

子供の頃からの夢の源をつきとめたと信じたマルチンは、Mogniac の農場で働き始める（39章）が、昼間の力仕事が終わって夜になると、彼は外に出て遠くの灯火を眺める。

“ Night fell, lights trembled on the silhouetted hills, the windows of the farmhouse lit up; and when far, far away, in the unknown gloom ²³⁾, a tiny

rattling train would pass by broken into small fiery segments, and vanish, Martin told himself with deep satisfaction that from there, from that train, the farm and Mogniac looked like a handful of jewels. He was glad to have heeded the call of those lights, to have uncovered their lovely quiet essence. ”
(164-165) (下線は引用者)

おそらくこの場面は、マルチンにとっての light(s) の意味を明かす手がかりになるだろう。遠くの(闇を背景にした)灯火がマルチンの人生において、かけがえのない意味を持っていることは疑いない。

さて、Mogniac の農場でしばらく働いた後、マルチンはここを後にしてベルリンに向かい、乗り込んだ列車の窓からあの灯火に別れをつけようと、灯火の出現を待つ (He stood waiting for the appearance of his beloved lights, to bid them good-bye.) (166)。そして、闇の中に (in the blackness)(166)灯火が現れると、車掌にあれが Mogniac の明かりであることを確認しようとする (“ Those lights there - that’s Mogniac, isn’t it? ”)(166)が、その期待はもろくも裏切られてしまう (“ In any case, it’s not Mogniac, “ “ Mogniac can’t be seen from the railroad. ”) (166)。しかし、たとえ Mogniac が灯火の源でなかったにせよ、それによってこの作品に占める light(s) の意味が減じるものではない。light(s) のイメージを中心にこの作品を読みなおすとき、37 - 39章が一つのクライマックスをなすことは間違いないだろう。

そして、マルチンがベルリンに戻った後、ついにソ連への密入国 (この小説のコンテキストでは、Zoorland という架空の国への旅) を企てて行方不明となり、友人のダーウィンがその知らせをスイスに住むマルチンの母に伝えるに行く最終の48章 (ロシア語版では50章) まで light(s) は作品から姿を消す。まるで、以後の展開がエピローグでもあるかのように。

* * *

こうして、作品中に現れた light(s) のイメージを追ってみると、その出現は作品全般にはわたらずに、かなり偏りがあることがわかる。また、これが

ら見るように、light(s)が出現するときには、しばしばその意味を説明するような記述が見られるから、その意味を探ることは難しくない。

たとえば、light(s) が最初に現れる5章では、黒海のほとりで the diamond lights of Yalta を見た後、マルチンは次のように感じる。

“ and suddenly Martin again experienced a feeling he had known on more than one occasion as a child: an unbearable intensification of all his senses, a magical and demanding impulse, the presence of something for which alone it was worth living. ” (20)

マルチンが感じたのは、まず自分の全感覚の強まりであり、それは彼が幼年時代からしばしば体験していたことでもあった。それはここではさらに神秘的な感覚、人生の意義と結びつくような啓示ともつながっている。そして、マルチンのこの傾向は、彼のロマンチックな気質と言い換えることもできる。実際ナボコフが英訳によせた序によれば、この作品は最初

(ロマンチックな時代)と題されていたというし(x)、9章には What fired him as a rule was the remote, the forbidden, the vague - anything sufficiently indistinct to make his fantasy work at establishing details (34)とあるのだから、マルチンをロマンチックな気質の持ち主²⁴⁾と呼ぶことは自然だろう。

さらに、遠くの灯火は旅のイメージともつながっている。註19で引いた7章冒頭の記述では、マルチンの心を引くものとしてtravels と distant lights が並列されていたが、11章では dots of lights を見た直後にマルチンは “ Travel, ” (48) とささやく。ロマンチックな気質の持ち主マルチンはつねに、見知らぬ土地への旅を夢見ており、Zoorland への最後の旅立ちもその延長線上にとらえられる。

次に37 - 39章の Mogniac 行きだが、37章の終わりには Who knows - perhaps, by some caprice of space, he was already beyond the Zoorland border, in the uncertain night, and presently would be challenged. (159) とあって、灯火の源を訪ねようというこの企て自体が現実的でないもの、空想の中の出来事のよ

うに描かれている。light(s)が非現実的なものと結びついていることはここでも明らかだろう。そして、既に引用したように、39章では遠くで列車が通り過ぎのを見たマルチンは、the call of those lights に応えて、their lovely quiet essence を発見したことに満足を感じる。これもまた彼の空想的で神秘的な感覚を浮き彫りにするものだが、結局この発見が誤解とわかる顛末は、マルチンのロマンチックな特質を考えれば、むしろふさわしいものだろう。容易に得られるものは、ロマンチックな憧れの対象としては似つかわしくないのだから。

* * *

このように、作品中に繰り返される light(s) が主人公マルチンのロマンチックな気質と結びついて、遠いもの、とらえがたいものを示唆し、旅とか、人生の真実とかいったものにもつながっているとしたら、しばしばそれと対置されながら頻出する dark(ness), black(ness) というイメージは何を意味しているのだろうか。

これに関して、従来言われてきたのは、black と「死」とのつながりだった。ナボコフ自身も英語版への序の中で The memory of the childish reverie blends with the expectation of death (xii)と述べて、マルチンの Zoorland 行きと死の願望とを結びつけているが、作品中 Zoorland と「闇(黒)」とは密接な関係がある。たとえば、35章には The night of Zoorland seemed to him even darker (150)とあるが、Zoorland と夜との連想は、39章でも the desire to peer into the merciless Zoorland night (165) という形で現れている。そして、Zoorland と「闇(黒)」、「死」の結びつきが最も鮮明なのは物語の結末部分だろう。

これは、一義的にはマルチンの友人ダーウィンがスイスに住むマルチンの母にマルチンの行方不明を告げにいく場面だが、実はラトヴィアから密かにソ連国境を越えたマルチンが見たロシアの森とも重ねられていることが、指摘されている²⁵⁾。とすれば、物語の最後 (The air was dingy, here and there tree

roots traversed the trail, black fir needles now and then brushed against his shoulder, the dark path passed between the tree trunks in picturesque and mysterious windings.) (205) (下線は引用者)に繰り返される dark, black は、(ソ連国内での)マルチンの死を暗示するものと考えてもおかしくない。

さらに、21章にはスイスでマルチンが岩登りを企てて、危うく命を落としかけるエピソードがあるが、Berdjis はこのときに現れる the entirely black butterfly (86)に注目して、これを a traditional premonition of death²⁶⁾ととらえている。また、同じ21章には姉とその夫を同時に亡くしたソーニャが dressed all in black (87)と黒づくめの服装で登場するが、喪服(死)と黒のつながりも自然だろう。

こうして、眺めていくと dark, black と死の結びつきを全く否定することはできないだろう。だが、作品中でしばしば light(s) (何よりもロマンチックなものと結びついていた)と対置されている dark, black を「死」だけとつなげることも正しくない。次に他の可能性を探っていこう。

* * *

さて、この作品に現れた dark, black の意味を考える一つの手がかりは、女主人公とも言えるソーニャがしばしば「黒」と結びつけられていることだろう。先に引用したように21章でソーニャは dressed all in black で登場するが、彼女と黒との結びつきは服装だけにとどまらず、髪の色、眼の色にまで及んでいる。

まず、16章でソーニャは、母親と一緒に初めてケンブリッジのマルチンを訪ねる。その時の服装は英語版では navy-blue suit (67)とあるだけだが、ロシア語版では - (200) とあって(形容詞の部分直訳すれば dark-blue)暗さが強調されている。さらに、その髪は Her bobbed black, somewhat coarse-looking hair (67)と描かれ、その眼は her dull-dark, slightly slanting eyes (67) と描かれる²⁷⁾。こうした繰り返しは、ソーニャと「黒」の結びつきを読者に印象づけるためのものだろう。

ついで20章でマルチンは、ダーウィンと一緒にロンドンに赴いてソーニャに会うが、ここでも her short black hair (80)、her black hair (82) といった記述が繰り返されている。そして、22章には her black hair (93)とともに Her dark eyes (94) が描かれ、さらに21章に続いてこの章にも in her black dress (96) とあるから、ソーニャと「黒」の結びつきはいっそう読者の脳裏に焼きつけられる。

こうした引用はこの他いくらでも引くことができるから、ここでは次にマルチンがソーニャと最後に出会う45章に注目してみよう。するとここでも彼女は black jumper (186) を着て登場し、彼女の one black strand of hair (187) が強調されている。これにたいして、かつて彼女にふられたダーウィンが新しく結婚相手に選んだ女性の話がこの章でマルチンとソーニャとの間に交わされるが、48章ではその女性がソーニャとは対照的に light eyes (197) (

[291]) をしていることがわかる。二人の女性の眼の色の対照もやはり意図的なものと言わざるをえない。

さらに言うなら、ロシアから亡命する途中、船内でマルチンが知り合った頹廢的な女流詩人アラは何よりも「赤」と結びつけられていた (her red lips [28-29], with rubies as red as blood [29], the rubineous fumes of sin [29] など) から²⁸⁾、この作品においてナボコフは女性と色彩を意識的に結びつけていたと考えるもおかしくない。ソーニャと「黒」との結びつきは決して偶然ではなく、マルチンの周辺から light(s) が消えたイギリスでの生活においてその黒が支配的になることにも、何らかの意味が求められてよいだろう。

* * *

さて、ソーニャと「黒」との結びつきはこれまで看過されていたわけではない。たとえば、Haber はソーニャの一家であるジラーノフ家が蛇の性格を持つ (死と争いを象徴) とし²⁹⁾、ソーニャを蛇娘 (snake maiden) にたとえてこう述べる³⁰⁾。

“ Sonja’s destructive character - her penchant for tormenting and

ultimately rejecting her suitors, her wicked tongue - reveals a snake-like nature. Her black hair and dark, lustreless eyes reinforce the demonic impression. ”

確かに男どもの気持ちを弄んで、最後には求婚をはねつける彼女の中に、cruel lady³¹⁾ を見ることも不可能ではない。だが、Haber のように、彼女の「悪魔的」性格ばかりを強調し、それと「黒」を直結させてしまえば、ソーニャという女性のもっと重要な側面が見落とされてしまうだろう。ソーニャはもっと「ふつうの」娘としてとらえられねばならない。

この小説の英語版に寄せた序の中でナボコフ自身は、主人公マルチンを the kindest, uprichest, and most touching of all my young men (xi) と評したが (別の場所では、naive と述べている [xi])、このマルチンを「平凡な青年」³²⁾ と呼ぶことは自然だろう。そして、彼が人生に見出す the most ordinary pleasures (x) の中にソーニャとの恋愛も含まれるとしたら、ナボコフが a moody and ruthless flirt (xi) と評したソーニャ自身を、ふわふわとした恋愛にばかり心を奪われた「平凡な娘」³³⁾ と考えて少しも不思議はない。

もちろん、彼女はマルチンに Zoorland につながるアイディアを吹き込んだり、死んだ姉の the most important thing in life was to do one's duty and think of nothing else (93) (さらに、she didn't mean work or job, but a kind of—well, the kind of thing which has an inner importance. [94]) という発言を紹介して、マルチンの心に刺激を与えたりする意味も担っているが、それらも「ふつうの」娘としてのソーニャのイメージを覆すものではない。かつて論じたように、『偉業』は「ポシュリャーク³⁴⁾ を主人公にして、そのポシュリャークたる魅力を正面に押し出した作品」³⁵⁾ だと考えられるが、俗物マルチンの恋愛の対象ソーニャの第一の特性はその俗物性 (ポーシュロスチ、poshlust,)³⁶⁾ にあるのではなかろうか。

* * *

ナボコフ小説において光と影のコントラストが重要な意味を持っている³⁷⁾

ことはここで繰り返すまでもないが、その光と影のコントラストは、「明暗」の効果と言い換えることもできる。そして、ナボコフの初期ロシア語短編について論じた Naumann は、『チョールプの帰還』(, 1925) に関して The light-infused beaches of Nice and snow-covered Switzerland mountains contrast with the pointedly quiet, dark, dead German town³⁸⁾ (下線は引用者) と述べているが、これは幸せ・希望を象徴する (Nice は主人公が新妻とハネムーンで訪れた場所) light と、陰鬱な日常性を表す dark(ness) との対照を指摘したものといえる。

とすれば、この『偉業』においても、光と闇 (黒) の対照を、非日常的なもの・未知のもの・憧れの対象と日常的なもの・ありふれたもの・俗物的なものの対立ととらえてもおかしくない。既に繰り返し指摘したように、この作品において光はしばしば闇 (黒) とのコントラストの中で描かれていたのだから、闇 (黒) の意味は光の持つ意味との対照の中で考えられるべきだろう。闇 (黒) が死や破滅性を表すことがあるとしても、それはこの作品における中心的な意味ではない。

この作品の流れをもう一度整理するなら、主人公マルチンは子供の頃から「光」に憧れるロマンチックな青年だった。そして、彼の幼少年時代は「光」と切り離せなかったが、亡命後ケンブリッジ大学に進み、ソーニャという女性に魅惑されてから、彼はポーシュロスチと直結する「闇」の世界に浸ってしまう。ケンブリッジ時代の最後にマルチンとダーウィンが拳で決闘する場面があるが³⁹⁾、その後並んで横たわった二人が見上げる空には dark branch (126)が見えるだけだ。この dark branch はおそらく二人の共通の恋人ソーニャを暗示し、彼らが「光」を失っていることを示唆するものだろう。

しかし、大学卒業後ベルリンまでソーニャを追っていったマルチンは、ついに南仏旅行で再び「光」を見出し、その導きによって Zoorland への旅を企てる。こうして彼のロマンチックな本質はついに「闇」を克服したかに見えたが、その旅は結局「死」という別の「闇」への旅に終わった。

この物語は、基本的な枠組みにおいても「光」と「闇（黒）」のコントラストの上に構築されていると考える。

註

- 1) 邦訳題名は『青春』（渥美昭夫訳、新潮社、1974）だが、本論ではロシア語原題からの直訳によって『偉業』と表記する。
- 2) A. Field, Nabokov: His Life in Art, Boston, 1967, p. 117.
- 3) Ibid., p. 118.
- 4) A.C. , , 1997, . 75.
- 5) P. Tammi, *Glory*, in V.E. Alexandrov(ed.), The Garland Companion to Vladimir Nabokov, New York, 1995, p. 170. なお、ナボコフのロシア語小説について細かく論じた J.W. Connolly, Nabokov's Early Fiction, Cambridge, 1992 も、この小説についてだけは論じていない。
- 6) V. Nabokov, *Glory*, New York, 1971, p.xiv. 以下、英語版からの引用は、これにより、そのページ数を記す。
- 7) L. Toker, Nabokov: The Mystery of Literary Structures, Ithaca, 1989, p. 88.
- 8) Ibid., p. 100.
- 9) Ibid., p. 102.
- 10) 『偉業』と「おとぎ話」については、cf. E.C. Haber, Nabokov's *Glory* and the Fairy Tale, Slavic and East European Journal, Vol. 21, No. 2, 1977, pp. 214-224 .
- 11) G. Hyde, Vladimir Nabokov: America's Russian Novelist, London, 1977, p. 52.
- 12) Tammi, *op. cit.*, p. 175.
- 13) cf. J. Grayson, Nabokov Translated: A Comparison of Nabokov's Russian and English Prose, Oxford, 1977, p.119. なお、Grayson は、英語版の方が Some of the colour epithets are more vivid. だとも述べている。cf. Ibid., p. 122.
- 14) ナボコフの自伝にも夜行列車の窓から a handful of fabulous lights that beckoned to me from a distant hillside (V. Nabokov, Speak Memory: An Autobiography Revisited, New York, 1967, p. 24)が見えるという記述がある。cf. J.B. Foster, Nabokov's Art of Memory and European Modernism, Princeton, 1993, p. 30.
- 15) cf. N.W. Berdjis, Imagery in Vladimir Nabokov's Last Russian Novel (), Its English Translation (The Gift), and Other Prose Works of the 1930s, Frankfurt, 1995, pp.

64-65.

16) cf. Hyde, *op. cit.*, p. 53.

17) 英語版の lights にあたるロシア語は の複数形だが、 という単語は既にこの引用の少し前に現れている(-)(. -

2, . 1990, . 167. 以下 からの引用はこれにより、そのページ数を記す)。しかし、英語版ではそこは eyes, reddish brown from the flames(20)とあって、lights は用いられていない。また、しばしば light(s) と訳される もロシア語版では同じ章に既に現れている(167)。

18) ロシア語版では (168) とあって、闇のイメージはいっそうはっきりしている。

19) なお、7章の冒頭には次のような記述がある。

“ From that year on Martin developed a passion for trains, travels, distant lights, the heartrending wails of locomotives in the dark of night, “ (24)

20) ロシア語版では (188)。

21) ロシア語版では18章(英語版では17章)で

とか

(203)というように

が使われているが、英語版では the entire city was spewing fireworks、さらに they sped through the streets, nearly burning down ... (71) となっていて、lights は用いられていない。

22) 29章には the colored lights of the paper lanterns (126) というロシア語版でと訳される lights が現れている。

23) ロシア語版では (267)とあり、闇()のイメージはより鮮明になっている。

24) Nicol は Martin Edelweiss grows up under the influence of fairytales and medieval romances (C. Nicol, Why Darwin Slid into the Ditch: An Embedded Text in *Glory*, The Nabokovian 37, 1996, p. 48.)と述べている。

25) cf. Toker, *op. cit.*, p. 101.

26) Berdjis, *op. cit.*, p. 227.

27) ロシア語版では , - (200) という表現が用いられている。

28) cf. Berdjis, *op. cit.*, p. 66.

29) Haber, *op. cit.*, p. 221.

30) Ibid., p. 220.

31) Ibid., p. 217.なお、Clancy はソーニャを *femmes or jeunes fatales* と呼んでいる。

cf. L. Clancy, *The Novels of Vladimir Nabokov*, London, 1984, p. 45.

- 32) 『青春』、渥美昭夫「訳者あとがき」、p. 261.
- 33) Toker はソーニャを *A Russian Beauty* の女主人公などと並べて、*She is one of the series of Nabokovian wasted women* とも評している。cf. L. Toker, *Nabokov's Glory: "One Example of How Metaphysics Can Fool You"*, *Russian Literature* XXI, 1987, p. 311.
- 34) (poshlyak:俗物) についてナボコフは、「ゴーゴリ論」の中で触れている。cf. V. Nabokov, *Nikolai Gogol*, New York, 1961, p. 71.
- 35) 拙稿「ナボコフ小説の「俗物」」、「えうゐ」24号、1993年、pp. 14-15.
- 36) cf. Nikolai Gogol, pp. 63-74. なお、エロフェーエフは『偉業』で を代表する人物として、アラの夫とヘンリー叔父さんを挙げており(. , . 1990, . 191)、ソーニャはそこに含まれていない。
- 37) 前述の Berdjis も前掲書の中に *Light Effects* という章をもうけ、*Light and Shadow in Contrast to Substantiality* について論じており、*darkness as the hiding place for crime* と *light as a refuge* を対比している。cf. Berdjis, *op. cit.*, p. 294. また、Borden はナボコフの *Arcadian Garden* の特徴として、*the flaking or dappling shade and light effect of sun-struck foliage* (R.C. Borden, *Nabokov's Travesties of Childhood Nostalgia*, *Nabokov Studies* 2, 1995, p. 112.) を挙げている。
- 38) M.T. Naumann, *Blue Evenings in Berlin: Nabokov's Short Stories of the 1920s*, New York, 1978, p. 30.
- 39) この決闘は直接的にはソーニャを原因としたものではないが、Lee も *as an expression of his jealousy* と述べている (L.L. Lee, *Vladimir Nabokov*, Boston, 1976, p. 54.)ように、ソーニャも決闘の遠因となっている。

Огни и темнота в романе «Подвиг» Набокова

Юити Исахая

В романе «Подвиг» Набокова мы замечаем много «повторяемых образов», и из этих образов нас больше всего интересуют огни.

В детстве Мартын, герой этого романа, увидел в окне ночного поезда «горсть огней вдалеке, в подоле мрака, между двух холмов». С тех пор его увлекли далекие огни в темноте. Многие обращали внимание на эти огни, но никто не отмечал, что они часто появляются «в темноте». Мне кажется, что контраст огней и темноты – важнейший опорный образ этого романа.

В детстве в мире Мартына было много огней, но когда он переехал в Англию и влюбился в Соню, в его мире исчезли огни, его покрыла темнота. И после того как он разлюбил Соню и поехал в южную Францию, он снова обнаружил огни в окне поезда. Он сошел с поезда и пошел искать источник огней, и в том месте, которое он считал источником огней, он составил странный план: путешествие в Зоорландию. Вернувшись в Берлин и расставшись с Соней, он поехал в Зоорландию (своеобразное название Советского Союза) и там исчез.

В этом романе огни явно связаны с романтическим характером Мартына. А что означает темнота? Часто считают, что темнота относится к смерти и разрушительному началу. Но в этом романе

темнота (чернота) тесно связана с Соней. У нее черные волосы и темные глаза, и она часто носит черное платье. Она, с одной стороны, роковая женщина, но с другой стороны, лживая, пошлая девушка, имеющая множество поклонников и отвергающая их всех.

Судя по всему, темнота прежде всего означает пошлость. И сюжет этого романа основывается на контрасте романтического, с которым связаны огни, и пошлого, с которым связана темнота. Можно утверждать, что оппозиция «огни и темнота» достойна внимательного исследования в этом романе.

Lights and Darkness in Nabokov's *Glory*

Yuichi Isahaya

Key words: nabokov, glory, emigration, imagery